

## ニコラ・プッサン作《蛇に追われる男のいる風景》の主題とその典拠について

瀧 良介 (東京大学)

17 世紀のローマで活動したフランス人画家ニコラ・プッサン (1594~1665) は、物語画家としてはもとより、古典的風景画の完成者としてもその名が知られる。とくに 50 代半ばを迎える頃の彼の作品に顕著な幾何学的な明晰さは、風景画史における彼の地位を不動のものにしている。ただし注意を要するのは、彼の風景画が、そこに付随する人間の行為=主題に関して、このジャンルの伝統的語彙とは明らかに異質なものを含んでいる点である。なかでも、牧歌的風景の中で繰り返される蛇との予期せぬ遭遇のモチーフは、長らく研究者の注目の的となってきた。

ローマにおける最大のパトロンであったカッシアーノ・ダル・ポッツォ、ないしその弟であるカルロ・アントーニオに向けて 1630 年代末に制作された《蛇に追われる男のいる風景》(モンテリオール美術館) は、プッサンが蛇との遭遇を題材としたおそらく最初の風景画作品である。本作には、約 10 年後にパリの銀行家ジャン・ポワンテルのために描かれる《蛇に殺された男のいる風景》(ロンドン、ナショナル・ギャラリー) のセンセーショナルな主題の萌芽がすでに見られる。その主題の解明は、プッサンの蛇への執着の動機をより原初的なレベルで把握することを可能にし、ロンドンの絵はもちろんのこと、その後も彼の風景画に都度回帰してくる不吉な蛇の意味を解釈するにあたり必要な重要な前提を提供してくれるだろう。

本発表では、プッサンの座右の書でもあったチェーザレ・リーパの『イコノロジーア』に立ち返り、同書の中の「危険」(pericolo)の寓意が《蛇に追われる男のいる風景》の主たる典拠となっていることを提示する。リーパのテキストは、人間の運命が順境から逆境へと容易に変転することを諷諭的に表す教訓的絵画として本作を解釈した R・ヴァーディの仮説を裏付ける。しかし他方またそれは、この絵の主題が、ヴァーディの主張するようなストア主義的な恒心の美德ばかりでなく、感覚的、身体的、世俗的快楽にまつわるアウグスティヌス主義的な罪の概念や、罪を犯した人間に対して降りかかる災難の背後で働く神的摂理への省察をも含んでいることを示唆している。

なおまた注目すべきは、リーパの「危険」の寓意が、そうした摂理の存在の証明として、蛇に襲われる若者の姿とともに、稲妻を伴う嵐という気象現象に言及している点である。このことは、ロンドンの絵の制作から間もない 1651 年の《嵐》(ルーアン美術館) や《ピュラモスとティスベのいる風景》(シュテューデル美術館) において、プッサンが突如として激しい嵐の情景を描くこととなった背景について、新たな見解を付け加えることを許すだろう。